

生たちもいた。

コロナ禍の困難のなかでも、ほとんどの4回生が卒業研究を完成することができた。2月2日、3日、卒業研究の研究審査会を、例年通り交流センターホール（定員600名）にて、対面で行えたのは幸いであった。ドアを開けて換気を確保しつつの開催であった。その際、希望する者にはリモートでの発表も認めるハイブリッド形式とした。ただし、例年であれば、3回生も傍聴する習わしであったが、感染予防のため、出席者を4回生と教員（計約50名）に絞らざるをえなかった。

3月には、瀧准教授が優秀職員として学長から表彰された。理論・実務ともに精通した流域治水政策の研究者として認められており、水害や国土交通省の「流域治水」への政策転換に関連し、新聞・専門誌・テレビに多数出演し、本学の地に足のついた研究姿勢を広く一般に伝えるとともに、知名度向上に大きく貢献したことが、学部長からの推薦の趣旨であった。

令和3年度は、9月卒業1名を加え、40名が卒業した（<https://depp-usp.com/archives/5582>）。

令和3年度入試（一般選抜）の志願倍率については、前期日程6.3倍、後期日程12.9倍と高めであった。隔年で見られる倍率変動に加えて、コロナ禍で大都市の大学で多かったキャンパス長期閉鎖の影響もあったかもしれない。

## 環境建築デザイン学科のこの一年

高田 豊文

環境建築デザイン学科長

2019年度末に伊丹清講師が退職され、その後任として鄭新源講師を迎えて、本学科教員定数の14名で2020年度がスタートした。鄭先生は、韓国の嘉泉大学校一般大学院を修了後、韓国の建築設計事務所に勤務され、その後、東京大学大学院博士課程を経て、日建設計総合研究所と千葉大学・東京理科大学で環境工学に関する研究に従事された。オフィスビルや公共施設での光環境や温熱環境の測定と執務者に対する

環境心理のアンケート調査など、より良い室内環境づくりを目標として建築環境工学の幅広い分野で研究を行ってこられ、建築環境工学に関する研究と実践教育両面で優秀な人材として、本学科のスタッフの一員に加わっていただいた。しかし、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、伊丹先生の退職記念祝賀会や鄭先生の歓迎会が開催できなかったのは、非常に残念であった。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症に振り回された1年であった。2019年3月末時点で、大学からは、感染防止対策を実施した上で4月8日に通常授業を開始できるよう準備の指示があったが、本学科では、4月17日まで対面授業を行わない方針を検討していた。その後、前期授業開始を4月22日とすることが大学から周知されたが、本学科では、5月11日まで対面授業は行わない方針を決定した（4月22日～5月10日は課題等で対応）。さらに、4月9日には、本学科の学生に対する教員メッセージを学科HPで公開した（学生に向けた学長・副学長メッセージの公開は4月17日）。学科学生の通信環境に関するアンケートも全学に先行して実施したが、このような機動的かつ柔軟な対応は学科教員の発案によるものであり、そのおかげで、本学科では全学に先んじたコロナ対応をとることができた。最終的には、大学全体で前期授業は原則、遠隔授業となった。授業開始当初には学生・教員ともに遠隔授業に戸惑う場面もあったが、早めの準備が奏功し、本学科特有の設計系の演習科目でも大きな混乱もなく遠隔授業に対応することができた。

後期には対面授業に戻ったが、感染再拡大の影響で1月に再度、遠隔授業対応となった。本学科の最大のイベントである卒業研究・卒業制作発表会も、その実施方法について、開催直前まで協議が続けられ、最終的に、対面と遠隔のハイブリッド形式での実施となった。例年とは異なる実施方法のため、いくつかの問題点もあったが、全体としては順調に実施されたと言える。学科として、この種の発表会をハイブリッド形式で実施する上での貴重な経験にも

なった。この発表会では56名の学生が発表を行ったが、コロナ禍の状況にもかかわらず、確たる自分の信念を持ちながら、1年間地道にかつ丁寧に課題に取り組み、優れた成果をあげたものも見られた。

新型コロナウイルス感染症は災厄であるが、それによって、学生・教員は、少なくとも1年前に比べて、オンライン会議・授業のスキルを相当にアップさせている。この困難な状況が、人の成長や社会・組織の発展のチャンスであると捉えたい。

## 生物資源管理学科のこの一年

**原田 英美子**

生物資源管理学科長

2020年度、生物資源管理学科では、4月に住田卓也先生が講師として着任され、教員18名のメンバーでスタートを切った。住田先生は植物病理学がご専門で、植物病原糸状菌を中心として、微生物農薬の開発、病原菌の感染制御メカニズムの解明等の研究を行っている。入学者62名を迎え、平穏に新学期を迎えた。・・・となるはずであったが、実際には、2019年末から拡大したCOVID-19パンデミックの対応に追われて右往左往しているうちに、あっという間に1年が経過したというのが正直なところである。

この原稿を書くために本年度の記録を改めて確認していたところ、4月1日の学科長着任の挨拶として学科教員に送ったメールに「4月19日までは大学に来ないように、学部生・大学院生に周知徹底をお願いします」と書かれており、当時の緊迫した雰囲気を感じ出した。「4月6日の臨時学科会議の予備メール会議」の記録では、「4月20、21日に実施するオリエンテーションの内容は予定通りでいいか」「動植物管理のために学生を登校させる際の基準は?」「現段階で不明な点、事務局への問い合わせ項目のとりまとめ」などが協議されていた。本学科の教員が、研究室の学生の状況を熟考し、場合によっては他大学から情報収集し、この困難な中でど

のように研究・教育活動を行うかを真剣に考えて議論してきたことの貴重な記録ではないかと思った。入学式の式典中止、オリエンテーションの中止、それに引き続いて前期授業開始が延期となることを受け、学科では学生へ学科ホームページ等を用いて情報発信を行った。学科教員の寄せ書きを急ぎよ準備、4月15日付で配信した。インターネット環境に関する学科アンケートも4月20日の段階でとりまとめた。

教員間で情報交換すべきことは多いが、県外から公共交通機関で通勤している教員も少なくない中、会議のために一つの部屋に集まること自体がクラスター発生のきっかけとなることが危惧された。4月定例学科会議は、来学可能な者は対面での会議に出席、参加できない者はメール参加とした。5月以降は、入試関連など、オンラインでは資料の共有が難しい議題などについてまず対面で審議、そのあと各自の研究室に戻ってZoom（7月まで）もしくはMicrosoft Teams（9月以降）に移行して遠隔で会議を継続するという「時間差ハイブリッド」形式により学科会議を実施していた。

5月11日に前期講義が遠隔で開始したが、その直後の学生からのレスポンスは「体育や実験実習などが遠隔の座学で終わってしまい悲しい」「やりがいを感じられない」「パソコンの画面を見すぎて目が痛い」など、読んでいる教員の側も辛くなるような内容であった。課題のやりとりの際の通信トラブルなども頻発しており、遠隔講義のトラブルシューティングで悪戦苦闘の日々であった。

このように、波乱の中で進行していった2020年度であったが、夏が近づくにつれて遠隔講義のノウハウも徐々に蓄積、集中式の対面の実習が始まり、後期は制限があるものの、とにかく対面式の講義・実習を行うことができた。本学科は、環境科学部で一学年当たりの人数が最も多いこともあり、三密回避対策に特に配慮することが必要であった。年明けからは再度状況が悪化して遠隔に逆戻りとなった。

卒論発表会は、Microsoft Teamsを用い、3つの「部屋」で同時進行する形で実施した。実質